

サン・ジェンナー口の街、唱題のとき

——イタリア創価学会、「南」へ——

秋庭 裕

AKIBA Yutaka

0. Diego

ディエゴ・アルマンド・マラドーナがナポリを去る日、ファンは悲嘆に暮れたという。その日、マラドーナはナポリにおいて「聖人」となった。

知る人とぞ知るマラドーナであるが、1960年ブエノスアイレスの最貧地区に生まれ、幼少期より才能を見出され活躍したが、栄光を極めるのは、1984年に移籍したSSCナポリでのことである。

アルゼンチンはイタリアとの縁が深い。19世紀末から20世紀初頭にかけて、イタリアからアルゼンチンに向かった移民の総数は200万人を超え、アルゼンチン人口の半数以上がイタリアの血を引いているという¹⁾。

さて、マラドーナが加入したSSCナポリであるが、イタリア一部リーグのセリエAに属していたものの、また熱狂的なファンに支えられていたが、優勝争いとはまったく縁のない弱小チームにすぎなかった。セリエAで常勝を誇ったのは、トリノやミラノの「北」のチームであった。それが、マラドーナ加入後3シーズン目、SSCナポリはその61年の歴史で初のスクデット²⁾を得る。1898年に始まるイタリア一部リーグの歴史のなかで、ローマより南のチームが優勝したのは、じつにこのときが最初であった。

この勝利にナポリの人々は狂喜乱舞したのである。以降、マラドーナがナポリにもたらした数々の勝利と栄光の日々は1990年に至るまで続く。

「南」を代表するナポリの勝利は、サッカーにおける勝利であったが、それはサッカーに限定されるものでなかったことが重要である³⁾。

順風満帆に見えたマラドーナとナポリをめぐる潮目が変わるのは、1990年7月3日のことで、この日、ナポリのサン・パオロ競技場は、ある種、異様な雰囲気包まれた。この日は、たんにサッカーやマラドーナ個人を超えた次元の、イタリア現代史における社会変動のマグマが噴出した記憶されるべき一日であったのかもしれない。第14回W杯イタリア大会準決勝第一試合は、よりによってサン・パオロにおいて、イタリアとアルゼンチンで戦われることになったのである。1982年スペイン大会優勝のイタリアと、前回メキシコ大会の覇者アルゼンチンの対戦である⁴⁾。

マラドーナは、この大会直前の89-90年度にもSSCナポリを二度目のスクデット獲得に導いたのであったが、その「神にもなぞらえられる」ナポリの英雄が、主将としてアルゼンチン・チームを率い、他でもないサン・パオロで、イタリア代表と準決勝で雌雄を決することになったのであった。

地元開催で優勝を期待されるイタリアにとって、最大の難敵を迎えての一戦であり、空前の盛り上がりを示したのは当然だと思われるだろうが、その中に複雑に絡みあった歴史的な事情が入り込んでいた。ピッチ上のミクロな世界に、マクロなイタリア国家の政治や社会の次元が集約的、あるいは重層的に織り込まれていたのかもしれない

い。

このときのイタリア・ナショナルチームは、通例に違わず大部分が「北」の出身者だったが、はたしてナポリ市民は、そのイタリア・チームでなく、マラドーナが率いるアルゼンチン・チームを応援するのではないかと危惧されたことが、1861年イタリア統一以来の、最大の「国家的危機」とさえ評されることになったのであった。

試合の朝、イタリアを代表するミラノの日刊紙『イル・コリエーレ・デッラ・セーラ』は、「二つに心を引き裂かれたナポリ」の大見出しのもと、次のような記事を掲載した。「ディエゴ・アルマンド・マザニエッコは、人種差別的なイタリアに対する雪辱をはたすようにナポリ人をそそのかす。人種差別を体現するイタリア代表チームに対して、ナポリが叛旗を翻し、偉大なる「南」を体現するディエゴとそのアルゼンチン人の仲間たちを応援するようにそそのかすのだ。」⁵⁾

ディエゴ・アルマンド・マザニエッコは、17世紀スペイン・ハプスブルク家が支配するナポリ王国において反乱を起こした。マザニエッコは、魚の行商を営んでいたというが、スペイン提督を追放し共和制を樹立し、共和制の長の座に就くもわずか5日後に暗殺されてしまう。共和制自体も一年足らずでスペイン支配に復するが、ごく短期間とはいえ、民衆出身のマザニエッコが、「よそ者」である支配者スペイン・ハプスブルク家を打倒し、王都ナポリの首長の座に就いたことは、ナポリの人々にとって鮮烈な出来事であり、その事績は長く記憶に留められることになったという。

先の記事中の「ディエゴ・アルマンド・マザニエッコ」とは、1990年7月、ナポリ民衆の集合的記憶の中から蘇った文化英雄であり、象徴的にディエゴ・アルマンド・マラドーナ、その人に重ねられている。

そもそも、いくら W 杯とはいえ、スポーツ記

事でこのような隠喩が多用されるのもいくらか奇妙であるが、その比喩的表現にはさらに決定的に不可解な点が含まれている。

つまり、マザニエッコは、ナポリ民衆の代表として、「よそ者」スペイン・ハプスブルク家の支配に抵抗したが、マラドーナは、いくら地元チームの英雄といっても、しょせんは「外国人」、つまり「よそ者」のはずである。

いっそう不思議なことに、マラドーナ=マザニエッコが戦う「よそ者」としてイタリア・チームが位置づけられてしまっている。つまり、ナポリ人が「よそ者」イタリアと戦うという構図であるが、これは一体どういうことなのだろうか⁶⁾。

この疑問を解く鍵は、先の記事中の「南」という言葉である。イタリアにおいて「南」とは、しばしば「南部問題」の存在を指し示すが、それはどのような類の事実、認識、さらには社会・経済・政治問題であるのだろうか。

「南部問題」は、南北間の経済に端を発する大きな格差が、イタリア全体の円滑な発展を妨げているという認識から生じている。南部は、ナポリを州都とするカンパニア州も含む5州であるが、第二次大戦以降、状況は変化しつつも、この地域の後進的状況は今日も持続しているという。

「南部問題」という認識は、イタリア統一直後から存在していたというが、その後振幅はあるものの繰り返される社会・政治問題であったという。1990年の W 杯開催前の数年間は、まさにこの「南部問題」が深刻度を加えた時期でもあった。

第二次大戦後、南北間の格差解消のために⁷⁾、南イタリアに対する大規模な公共投資が行われてきたが⁸⁾、これら事業に対し、イタリア北中部から、国家財政を苦境に陥れるばかりか、マフィアなど犯罪組織の餌食になっていると非難や不信の声が高まったという。こうした不満を吸い上げて

急伸したのが地域主義的政治運動で、1982年結成の「ロンバルディア同盟」はその筆頭であった。

ロンバルディア同盟は、1989年「北部同盟」に改組されるが、その有名なスローガンの一つは「南部人の政府は泥棒の政府」というものであった。その意味は、勤勉で裕福な北部人が納めた税金は、腐敗した政党が支配するローマの政府に吸い上げられ、それらの政党に群がる怠惰で寄生的な南部人にばらまかれている。だから、北部人が自分たちの納めた税金を自分たちの地域だけで使う連邦国家が必要だという訴えであった⁹⁾。

北部同盟は、W杯開催直前の1990年地方選挙でミラノ市を含むロンバルディア州で大躍進を遂げ、次いでヴェネト州でも躍進する。イタリアで最も豊かな北部の人々が「納税者の反乱」を起こしたのは、目前に迫ったEC市場統合によって、競争力の低いイタリアが二流国に引きずり落とされるという不安に駆られてのものだったという。

北部同盟の反南部プロパガンダが効果を上げた裏には、シチリアのマフィアを代表とする南イタリア起源の犯罪組織¹⁰⁾の跳梁跋扈もあったからだという。北部同盟は、南部をマフィアと短絡させることで、反南部主義プロパガンダに大きな説得力をもたせることに成功したという¹¹⁾。

北部同盟は、南部の人々に対する差別感情を煽り立て、北イタリアの自治の精神と治安を守るとして、そのころ急増しつつあった外国人労働者を排除しようとしたのであった。先の記事中の「人種差別的なイタリア」という文言が焦点を結ぶのはまさにこの点なのであるが、さらにこの新たな問題が、南部問題と複合することで事態をより深刻にした。

つまり、イタリア国内の「南」から「北」への国内労働力移動も「移民」と見なされてきた歴史的経緯があり、これら「南」出身労働者も排斥の

対象にされたのであった。

南イタリア出身者がいわゆる第三世界出身の外国人労働者と同じ「よそ者」と同一視されるとき、「人種差別を体現するイタリア代表チームに対して、ナポリが叛旗を翻し、偉大なる「南」を体現するディエゴとそのアルゼンチン人の仲間たちを応援するようにそそのかすのだ」という言明が迫真の説得力を獲得したのであった。

ここで、またマラドーナがアルゼンチン人であったことが大きな意味をもった。アルゼンチンは、イタリアとは浅からぬ縁で結ばれていたが、地理的に「極南」にあるばかりでなく、「南北問題」の座標の中でも「南」に位置づけられていた。したがって、マラドーナが率いるナポリというチームは、イタリアの「南」と世界の「南」のいわば連合という二重の象徴性を帯びたのである。

このような次第で、1990年7月W杯準決勝において、ナポリの人々がイタリアでなく、アルゼンチンを応援するのではないかと、メディアは危惧したのであった。ナポリの人々が、ナポリを栄光に導いた英雄として、たんにマラドーナ個人に親愛の情を示すためアルゼンチンを応援するというのであれば、ただ微笑ましいエピソードですむかもしれない。しかし、もしも本当に、ナポリの人々がイタリア代表でなく、アルゼンチン代表に声援を送ることがあるとすれば、いったいイタリアはどうなるであろうか、という恐怖まじりの疑念が沸き上がったという。

問題は根深く歴史的、そして構造的で、国家としてのイタリア分裂の危機さえ予兆させるものであり、北部同盟が躍進したこの時期、非常な説得力をもったことが理解できるであろう。

1. *San Gennaro*

1990年W杯準決勝は、まさに「統一イタリア

の歴史の正統性そのものが問われた」¹²⁾のであったが、試合そのものは「凡戦」であったという。結末は PK 戦で決し、アルゼンチンが決勝に進んだ。

その日、ナポリ観衆は、イタリア代表に声援を送ったことで危惧は去った。マラドーナにも声援はあったというが、最後 PK 戦のゴールを決めたマラドーナにはブーイングも少なくなかった。

そして、この一戦がマラドーナとナポリとの関係に水をさすことになったのだという。決勝は、ローマにおいて西ドイツと戦われたが、アルゼンチン代表は、ピッチに現れるや否や、すさまじい罵声を浴びた。マラドーナがボールに触れるたび、悪意に満ちた口笛が響き渡ったという。非常に険悪な雰囲気に満ちた決勝戦だったという。

結局、1991年にマラドーナはナポリを去る。その理由は、カモッラとの交友、また薬物中毒などの問題とともに、前年 W 杯で生じたナポリとの溝が大きかったと指摘されているようである¹³⁾。

それでも、マラドーナがナポリを去る日、ファンが流した涙が集められてガラスに封入されて、彼の毛髪とともに祠堂に祀られたという。冒頭、マラドーナは「聖人」となったと述べた所以である。



図1 マラドーナを祀る祠¹⁴⁾

ナポリの街中を歩けばすぐに分かるが、聖人を祀った祠の類がじつに多い。京都で生活した者であれば、市内の地蔵を思い出してもらえば、イメージ的にピッタリと重なる。街を歩けば祠に当たるのだが、それは何を物語るのだろうか。それらが意味するところを考えてみたい。

キリスト教は、初代教会の弾圧の時代を経て、コンスタンティヌス帝による公認、そしてテオドシウス一世による国教化へ至り、その間、ローマ帝国の版図拡大やゲルマン民族大移動もあり、6世紀にはヨーロッパで唯一といってよい大宗教となった。

キリスト教はゲルマン民族に浸透する過程で、本来はキリスト教と関係のない要素を吸収したのであるが、「聖人（セイント）」もそのような存在である。ちなみに、マリア崇拜もそうだし、地獄や悪魔の考え方もうそうである。なお、これらは聖書に述べられていないことから、基本的にプロテスタントにおいては存在しない。

カトリックには、守護神として求められたギリシア・ローマ的な神々が、聖人に姿を変えて受け継がれたという事情が存在するのである。一神教



図2 ナポリ市中の祠堂¹⁵⁾

であるキリスト教ではまさか守護神とするわけに
いかなかったから、守護聖人とされたのである。

さて、ナポリの守護聖人として知られる「サン・ジェンナーロ」について述べよう。ちなみに、マラドーナは、今日もナポリにおいて、「第二のサン・ジェンナーロ」と呼ばれている。

サン・ジェンナーロは、今日も「奇蹟」を引き起こすことで有名である。彼は、ディオクレティアヌス帝によって迫害が行われていた305年に殉教したというが、その遺体は時を経てナポリへ移送され、そこで守護聖人となったという。ナポリへ移される時その遺骸から血が滴り落ちたというが、その血液が聖遺物としてガラス容器に封入され今日も保存されているのである。

そして、じつに驚くべきは、常は凝固している血液が、年に三度融解し液状化することである。その三度とは、聖人の殉教の日とされる9月19日、ナポリに聖遺物が戻ったとされる5月の第一日曜日、聖人の加護に感謝する日である12月16日である。融融は各期日から何日間か継続するが、過去に融融が滞ったときは、ヴェスヴィオ山の噴火、ナポレオンの侵攻、カンパニアの大地震などの天災や災厄に襲われたことから、今日もナポリの吉凶を占う年中行事的な祝祭日となっていて、信仰心の篤いナポリの人々の関心も非常に高い¹⁶⁾。

私たちは、イタリア創価学会調査のため、2014年9月22日、ナポリを訪れていたが、その折、この「奇蹟」に遭遇した。

ナポリ大聖堂は、14世紀に完成しジェンナーロに捧げられたが、この大聖堂において「奇蹟」は現出する。以下では、写真も交え、サン・ジェンナーロ祭の様子を紹介しよう。訪れたそのとき、聖職者がうやうやしく携えている、ガラス容器中のすでに融融したと思われる血液なのであろうか、赤黒い液体が揺れるのがうかがえた。



図3 ナポリ大聖堂¹⁷⁾



図4 中央上に血を封入した円形ガラス容器

聖職者は祭壇下までガラス容器を持ち運び、それを差し出すと、一般の信徒が歩み出て、そのガラス面に軽く口付ける。サン・ジェンナーロの融融した血液＝「奇蹟」に接した信徒は、感激と緊張が同時に押し寄せたような敬虔な面持ちで後方へ退くと、次の信徒が続いている。このようにして、しばらくガラス容器に口付けする信徒の姿は途切れることがなかった。

さて、ここまで、縷々述べてきた事柄を小括し



図5 聖職者がガラス容器を取り外す



図6 ガラス容器を手にする
この日、血液はすでに溶融しているようだ



図7 信徒がガラス容器にキスして下がる

て論を進めることにしよう。

まず、マラドーナに導かれ、イタリアにおける「南」の存在を指摘し、その問題状況について概観した。「南」と「北」の懸隔の存在、政治・経済・社会、あるいは意識におけるそれが、今日も継続していることを凝縮して鳥瞰を試みた。

次に、「聖人」となったマラドーナを知ること¹⁸⁾、「南」における「聖人」、ひいてはカトリック信仰の実相を紹介することを意図した。ただし、カトリック信仰といっても、教義的な次元におけるそれはのちに論ずることにして、生活実感というか、「肌」感覚ともいべきレベルで、ナポリの人々が「聖」や「信仰」にどのように接しているか、それを垣間見る機会を得たこともあり、スケッチを試みた。

2. 素描：イタリア創価学会史¹⁹⁾

創価学会の海外布教は、戦後15年を経た1960（昭和35）年10月、アメリカ合衆国を中心として北・南米より始められた²⁰⁾。創価学会以前に海外宣教を開始した日本宗教の事例も少なくないが、今日、創価学会は、Soka Gakkai International (SGI) として、192カ国・地域に展開し、220万人以上の海外会員を擁するとされていて²¹⁾、創価学会=SGIは、海外への広まりという点で、日本宗教としては最大、かつ群を抜いている。

イタリアへの宣教は、前年、創価学会第三代会長に就任した33歳の池田大作が、1961年10月ローマを訪れたことに端を発している。1960年の北・南米訪問に続けて1964年に至るまで、池田は会長就任以来、毎年世界各地を訪問している。この時期、池田が「世界」へ目を向けていたことは確かであるが、それがどのような意図に発したのか、もとより全貌は知るよしもないのであるが、一部について推論を試みた²²⁾。今回も欧州やイタリアに即し少しく想像をめぐらせてみた

い。

まず、池田の世界歴訪に始まる海外への宣教が、会長就任するやいなや開始されたこと、そして、当初より世界の極めて広範囲を射程に収めていたことは銘記されてよいと思う。

初の海外訪問であった北・南米行の翌年10月、池田は、ヨーロッパ9カ国歴訪の終わりに、ローマを訪れた。このとき商社員として滞在していた会員が「連絡責任者」に任命されたが、まだ「地区」は結成されていない。ローマに居住する会員数は限られていたし、イタリア人の会員はほとんど存在しなかったからである。

池田は、カトリックの総本山であるバチカンを二日間にわたり訪問し、サン・ピエトロ大聖堂、システナ礼拝堂、またバチカン美術館を見学している。また、古代ローマの中心であるフォロ・ロマーノの旧蹟も二度にわたって訪れるなど、悠久の歴史に思いを馳せたという。

この当時、日本・創価学会は、すでに巨大教団として戦後日本社会に屹立する存在であった。創価学会第二代会長戸田^{じょうせい}城聖が晩年の悲願とした目標会員数は75万世帯であったが、戸田没年の1958年に、すでに100万世帯に達するほどの大成長があった。池田が第三代会長に就任した1960年には150万世帯、そしてその翌年、つまり池田がローマの地にあったこの年には、200万世帯に到達するというさらなる大躍進があった。

池田の師である戸田は、軍部政府の弾圧によってほとんど灰塵に帰した創価学会を、戦後ほとんどゼロからスタートさせ、「折伏大行進」によって、戦後社会の中でフリクションを伴いながらも短時日で巨大宗教教団を現出させた。

さらに、池田大作は、戸田の創出した教団の成長の速度と規模を倍加させたのであった。戸田と池田という、いわば稀有の宗教カリスマが多段式ロケットのように切れ目なく点火することで、あ

たかも大気圏外へ運ばれる衛星のように、創価学会は、抜きでた超巨大教団として、戦後日本社会という天空に打ち上がったのである²³⁾。

さて、そのとき、そのような、ある種「絶頂」にあったと思われる池田であるが、ローマにおいて、その胸中に去来したかも知れぬところを想像してみたい誘惑に駆られる。

短い滞在期間であったが、バチカンへは二日間、フォロ・ロマーノへは午前と午後の二回も赴いたことはすでに述べた。そのフォロ・ロマーノでは「ローマの／廢墟に立ちて／吾思う／妙法の国／とわにくずれじ」²⁴⁾と和歌を詠じている。

すでに200万を超える会員を率いる若きリーダーの胸中に宿ったのは、古代ローマの悠久の歴史とその栄耀栄華の偉大さ絶大さへの感嘆があったと思う。バチカンも時間をかけ視察したというから、サン・ピエトロの大威容に心打たれたであろうし、またシステナ礼拝堂のミケランジェロの筆になる大壁面から全天井を覆う『最後の審判』の、細密に描きこまれた大画面の圧倒的迫力に息を飲んだはずだと思う。

彼地でのそのような感動ふまえ「妙法の国／とわにくずれじ」という決意を抱いたことは、池田が「絶頂」にある自分自身への一種の「戒め」として、初訪問のローマでの見聞が作用したのではないだろうか。池田は、日本ではすでに押しも押されぬ創価学会であるが、世界ではまだ一歩も歩み出していない。しかし、将来はバチカンで目の当たりにしたような「世界宗教」を展望するというような、そういう構図を得たのだと思われるてならない。

*

さて、次のステップへとイタリア広布（＝広宣流布）²⁵⁾が進展するのは1963年のことである。この年1月、池田は海外メンバー激励のためとして五度目の海外に旅立つが、イタリアもその旅程に

あった。このときローマにおいて「地区」が結成され、イタリア創価学会が実質的に産声を上げた。

なお、創価学会の海外での「地区」は、だいたい10名以上くらいの会員数に達したとき結成されている。まだイタリア人の会員はほとんど存在しなかったが、日本人の海外駐在員にくわえ美術や音楽を学ぶ留学生などが現地で新入の会員として加わったのである。

池田は63年の折、ナポリへ足を伸ばしポンペイを訪ねたが、このとき通訳を勤めたのは中島寿子（1939年生）であった。彼女はローマの美術学校で学ぶ画学生であった。前年、武蔵野美術大学を卒業するとすぐイタリア留学を決めたのは、61年6月第4回「学生部総会」において、池田が「最高の文化を築くのが広宣流布」であり、「語学を身につけ世界に友好の輪を広げてほしい」²⁶⁾と講演したのを聞き、外務省が実施した留学試験を受ける決意を固めたという。なお、寿子の弟で、後にイタリア創価学会の二代目理事長に就任する中島保（1941年生）も法政大学に通う学生であったが、同じ池田の講演に感激し、海外雄飛を心に誓ったのだという²⁷⁾。

この時代、池田は様々な機会をとらえて、青年たちに世界へ羽ばたくことを促した。アメリカSGIにおいても、池田のそのような薫陶をうけ渡米した青年は少なくないが、アメリカ合衆国には日本人移民とその子孫、あるいは戦争花嫁のような、直接の日本出自の人々がある程度以上存在した。しかし、イタリアや他のヨーロッパの国々では、通例、日本人の姿は希薄であった。したがって、任期を終えれば帰国してしまう駐在員ではない中島姉弟のような存在が、現地で組織を担う中心者として最初期の主要な責務を担ったのである。そしてその後、イタリアにおいては途切れることなく海外広布に日本を飛び出した青年たちが

続いたのである。

63年にローマ地区が結成され、池田を迎えて座談会が開催され、イタリア語での会合も行われるようになり、ぽつぽつと現地での折伏も進められ、65年頃には20人くらい、そのうち10人ほどがイタリア人会員となったという。イタリア創価学会初期の「功労者」として知られる、アマリア・ミリオニコ（愛称ダディーナ、1927年生、初代のイタリア婦人部長²⁸⁾）もこの草創期の入信（1966年）である。ローマ大学の出身で医者であったダディーナは、日本語を学んでいて知り合った日本女性から「仏法は生命の哲理。科学、医学とも矛盾しない」と折伏されたという²⁹⁾。彼女は、イタリア語の経本（法華経）や布教用素材のほとんど存在しない時代、日蓮の教えや池田の述べるところを、現地の人々が理解しやすいよう、いわば「文化的翻訳」を行ったことで知られている。

1967年、池田は正本堂³⁰⁾で用いる大理石を買い付けるため5度目のイタリア訪問をするが、このとき「男子部」が結成され、その「隊長」に中島保が任命された。男女合わせた「青年部」は18名ほどであったという。保は、65年に舞台美術を学ぼうとローマに渡ったが、数年後、覚えのあった柔道の腕を買われ体育教師として国立中学に職を得ていた（74年以降は、ローマの日本大使館現地採用職員として定年まで勤務³¹⁾）。

*

1970年になると、初代のイタリア創価学会支部長に金田光弘（1940年生れ）が就任する（会員は約120世帯）。金田は、69年イタリア広布を志し、永住を決意し日本を離れたという。中島姉弟もそうであったが、日本で入信しすでに熱心に信心していた素地に、池田の青年への海外広布の促しによって日本を飛び出したのである。最初、先進的な立体裁断の技術を身に付けようと繊維服

飾方面の仕事に従事したが、他職を経るなどし、78年から始めた地中海クロマグロを日本に輸出する事業が成功する。

当時地中海クロマグロは、すでに日本の二大商社が手掛けていたが赤字であった。金田はアイデアを凝らすことで「儲けた」という。一つには、商社が用いていなかった大型急速冷凍設備を地中海中探して、シチリアのパレルモで見つけ、それを用い、日本へ輸出する際の品質低下を防いだ。二つには、日本で珍重される「トロ」を中心に日本へ輸出したことである。イタリアではトロは偏愛されていないので、トロも廉価で仕入れることができた。これらのエピソードには、金田のある側面が現れていると思う。金田は、「個人指導」にも定評があったが、もともと理系であったこともあってか、その指導は「三証」³²⁾に照らすように行われ、理論的分析的で緻密であったという³³⁾。

少しさかのぼるが、1970年代中頃くらいからフィレンツェで現地青年たちの入会が目立つようになる。75年に壮年部と婦人部ができたというが、ローマは壮年と婦人が多く日本人も少なくなかったが、フィレンツェは、青年たちが中心でしかもほとんどイタリア人であったという。

そのフィレンツェでの青年層の盛り上がりは、正確な年代は不詳だが、おそらく76年、アメリカ創価学会(SGI-USA)に入信していた3人のジャズメン(スミス、パウル・ポーター、マービン・スミス)がイタリアでのバカンスがてらフィレンツェも訪れたが、なかでもドラマーのマービン・スミスは、そのとき触れ合った若いファンたちを熱心に折伏したのだという。彼らの折伏によって、勤行も唱題もまったく知らなかったイタリアの若者たちが「元気が出てくる」と日蓮仏法に魅せられたのであるという。

SGI-USA が60年代末から70年代半ばにかけ

定着する重要なきっかけが、ヒッピー文化やロックと親和性の高い若者層の支持があったことはすでに論じたが³⁴⁾、トスカーナにおいても日蓮仏法の出帆に同様な事情があったことが興味深い。

フィレンツェでの青年層を中心とした会員増加を受け、84年、それら会員の指導のため金田はローマからフィレンツェへ移動し、「イタリア創価学会事務所」を設置した。この頃、青年部はイタリア全土で750人ほどであったが、その半数をフィレンツェが占めていた。イタリア広布は最初ローマ中心であったが、84年には明らかにフィレンツェが上回り、事務所開設はこの好機を逃すなど東京(学会本部)から指示もあったという。なおこの後、ローマの責任者は中島保が務めた。

*

さてここで、もう一人、イタリア創価学会草創期の功労者として今日も多くのかから慕われる、神崎忠保(1943-2008)を紹介する³⁵⁾。

神崎は、青山学院大学を卒業し博報堂に勤務していたが、25歳の誕生日、1968年9月8日「第11回学生部総会」での池田の講演を聞き、世界広布の使命を感得したのだという(その講演において、池田は、いち早く「日中国交正常化」を打ち出し、当時の世論に大きなインパクトを与えている)。

神崎は、海外への渡航の機会を求め博報堂を辞し転職を試み、ヨーロッパとつながりのある会社を探したという。見つけたのは、イタリア勤務ができる日本の会社(服飾関係の貿易)であった。そうして、1974年ベルガモに赴任する。

ベルガモは、ミラノ北東40キロに位置するが、神崎は一日の仕事を終えると、折伏や青年の信心を指導するため、連日バスでミラノまで通いつめたという。神崎がベルガモにやって来たのが、ちょうどフィレンツェで青年が盛り上がり始めた時期であったが、フランコ・マルサルディ(1954

年生)は、神崎に育てられた一人である。音楽好きの友人を介しトリノで信心を始めたという。1976年1月のことである³⁶⁾。

マルサルディは、ミラノで高校に通った68年当時からどっぷりと学生運動に没入した。大学では地質学を学んだが、勉強より革命が大事だったという。しかし、このあとに「鉛の時代」がやってくる。政治には心底絶望し、落胆したという。そんななか、「革命」という単語の前に「人間」という形容詞が付されているという衝撃に出会ったのであった(『人間革命』)。

なお、この時代の北イタリアの入信者には、マルサルディ以外にも、学生運動に携わっていたり共産主義にシンパシーをいっていた者は少なかつた。

マルサルディは、1976年3月にミラノで神崎と出会う。神崎によって、創価学会の何たるかを理解したという。この頃ミラノでは15人足らずしか題目を上げていなかったが、70年代の終わりから80年代にかけ、30歳以下だと思われる人ばかりを狙って折伏したという。

そのようにしてミラノで会員が増加したのを受け、神崎は、1982年会社を辞め、イタリアから服飾雑誌などを大阪へ輸出する会社を自身で興し、ベルガモからミラノに転居し、マルサルディもいっしょに働いた。82年にミラノの会員は、200~250人くらいになっていたという。神崎を慕ってこれらの多くの人々が集ったのだという。

神崎は11歳年上であったが、マルサルディにとって兄のような親近感を強く感じる、魅了されるような人となりだった。神崎は、勤行し題目を上げるイタリアの青年たちに「地湧の菩薩」³⁷⁾を重ねるかのように悦び感じていたのが、その姿から伝わるようだったという。そういう神崎の青年への指導は情熱にあふれ生命力豊かで、その笑顔にちなみ『歩く太陽』³⁸⁾と愛称がつけられたとい

う。

神崎が強い信念を込めるように語る、「キリスト教は、イタリアに入って来て、それから世界に広まっていった。イタリアにはそういう宿縁がある。仏法もイタリアに伝わり、そして世界に広まっていく」という言葉に、マルサルディは衝撃を受けたと述懐している。

*

この頃の組織の伸長や変化を概観しておこう。1982年2月に現在も続く教学誌である『新ルネサンス Il Nuovo Rinascimento』がフィレンツェで創刊された³⁹⁾。

少しまとめて会員数の増加をみると次ようになる⁴⁰⁾。1984年、会員は世帯数では316世帯。86年1,183世帯。87年1,498世帯。88年2,729世帯。90年2,847世帯、個人単位では12,000人を超えたという数字もある。

榊勝彦(1959年生)という名前を紹介するより、やはり「サカキ」と変換し表記してしまうが、それはイタリア名のVittorio Sakakiがとても板についているからである。そのサカキは、1984年6月にフィレンツェに到着している⁴¹⁾。

元は北海道の出身。武蔵野美術大学で油絵を学んだが、学生時代から信心するようになる。学生するとき、ある会合で池田に会い、目と目が合った瞬間、強いインパクトを受け魅了されたという。以来、全力で学業と学会活動に邁進した。

84年修士を修了するが、大画面の絵が描きかただったのでフレスコ画を学びにフィレンツェ美術大学に留学した。学部卒業時、卒業制作が最優秀であればパリに留学できたが、残念なことに最優秀にはなれなかった。それでパリには縁がないなと思ったが、その頃から壁画のような大画面の絵が描きたくなり、ヴェネツィアかフィレンツェに行こうと思ったという。ちなみに油絵は300号が限界で、それ以上となるとフレスコ画になるが、

これはイタリアが本場であるとのこと。ところが、フィレンツェに来てみるとフレスコ画を教える教師が欠員だったので、フレスコ画の修復を学ぶコースに入った。そして、88年になると一通りの技能を身につけたので修復コースを辞めたという。

サカキがフィレンツェに到着したちょうどそのときが、前述した「事務所」の開設であった。350人の青年会員がいたが、長時間の唱題会や親たちに対する折伏など、彼らの活動がものすごく熱心であったことに驚いたという。

金田は2月にローマから移ってきていたが、日本人は二人だけだったので、サカキが事務所に寝泊りし電話番号から万端会員の面倒を見たというが、4月下旬から7月上旬は、金田のクロマグロ事業を手伝うためにパレルモの冷凍工場に住み込んで働いたという。

おそらく、サカキがフィレンツェにやって来た前年の83年頃に、イタリア全土を3つに分け、ミラノを中心とする北イタリアを神崎が、そして、フィレンツェを中心とする中部を金田が、さらに、ローマ以南を中島が、それぞれ責任者として受けもつという体制ができ上がったと思われる(なお、ミラノとローマにも事務所が置かれるのは1987年のことのように⁴²⁾。この「三者体制」確立は、これ以降のイタリア広布にとって非常に重要な節目となったと思われる。

1986年4月に「イタリア文化会館」開設のための土地と物件を購入する。元々は、メディチ家由来の「ヴィラ・ディ・ペラッジョ(素晴らしき遊楽の館)」の名をもつ由緒ある歴史的な建築と庭園である。イタリア文化会館は1992年6月25日池田を迎え開館するが、取得から開館までの期間、週末を中心にイタリア各地から集まった会員のボランティアによってかなりの部分の修復や整備が行われたという。そして、このときボランテ

ィアとして集い共同作業を行ったことが、会員の結びつきを強め、組織がさらに発展するためのよい取り組みとなったのだという。

*

92年のイタリア文化会館の開会、その二日後の「第1回イタリア青年部総会」では1万人が池田を迎えたという。1994年6月には「第12回世界青年平和文化祭」がミラノで開催され、8度目のイタリア訪問の途上、池田も出席している。

池田は、第一次宗門問題(1979年)により創価学会の会長を辞任したが、その後は「SGI会長」として精力的に活動することになった。ことに第二次宗門問題(1991年)によって、創価学会が宗門=日蓮正宗と袂を分かってからは、池田はいっそう積極的に海外へSGI会長として出ている。「世界青年平和文化祭」は、1981年シカゴで開催された「世界平和文化祭」を直接のルーツとするが、日本・創価学会が90年代以降、会員が世代交代期に入るなか、巨大組織の求心力を生み出し結束をはかる非常に重要な機能の一翼を担ったのである。タイトルに「青年」が冠せられるのは、1985年ハワイ開催時からであるが、90年以降くらいから海外で開催される頻度が高まったのは、SGIの旗印の下で海外が意識される度合いが強まったからだろう。

日本・創価学会のコンテクストからイタリアへ戻ると、94年池田をミラノで迎えるあたりまで、組織は順調に成長したと思われる。95年頃には会員数15,000人に達したと伝えられている。このあたりで、以下のような変遷があった。イタリア創価学会は最初、一般法人になったのであるが、それは82年で、それが89年に文化法人(INS インスという)になり、98年に申請し認可は2000年12月だったというが宗教法人となったという。理事長はいずれも金田が就任した。

つまり、ミラノ世界青年平和文化祭の後、会

員数が増加した創価学会にとって、イタリア社会において広く認知され定着が進んだ時期だったと思われるが、それはたんに宗教団体として規模拡大したことによるものではなかったと思われる。

それは、様々な平和や人権を擁護するような社会啓発運動、死刑廃止や核廃絶のためのキャンペーン活動など、宗教や仏教の言語を介しない社会活動が広範に繰り上げられたこと（それは文化法人「INS インス」と親和性の高いものであったが）によるものと思われる。文化法人 INS が選択されたことは、この時代のイタリア創価学会の志向性を端的に表していたと思われる。

そして、そういう方向へ組織を主導したのは理事長であった金田が中心であったという。

*

この時代以降のイタリア創価学会の軌跡をたどろうとするとき、SGI-USA の歴史を多少とも知っていれば、どうしても「フェイズ2」と比較したい誘惑にかられる。

本稿ではこのあたりを全面的に考察することはできないが⁴³⁾、日本宗教である日蓮仏法が、池田という強力に魅力あるカリスマの薫陶を受けたリーダーによって（アメリカやイタリアで）現地化される過程で、各々現地の事情によって揺り戻しを受け、調整を余儀なくされる段階を経て、より現地に適応する（二段階の現地化）というプロセスが相似していると思われる点が非常に興味深い。

SGI-USA の場合は、「フェイズ2」とよばれる混乱を伴う局面があり、それを乗り越えることが、海を越えた日本宗教が、アメリカ合衆国に定着するための必須の過程であったと考えられるのである。

イタリア創価学会においては、そのような局面は、文化法人時代の90年代の後半に始まり、そして、顕著になったのは2000年代の初頭であっ

たと思われる。90年代半ば以降、先に述べたような広範な社会活動を活発に行ったイタリア創価学会は、一般社会からの認知と評価が急激に高まり、またそれもあって会員数の伸びも順調に推移したと思われる。

そうしたなか、理事長の金田は、各界の名士たちと組織を代表し親交を深める場面が多くなった。また、公的な場面でSGI会長の池田の名代として、ときに世界のリーダーたちとの交流の場に登場することも度重なった。これら脚光の当たる舞台での活躍が増すにつれ、組織内でも金田がリーダーシップを強力に発揮する頻度・機会がさらに多く・大きくなったと思われる。

2000年に至る光景は、表面は万事が順調に運んでいるように見えたのであった。この年は日本・創価学会の創立70年の佳節にあたり、それにことよせてイタリアも組織をあげ新入会員獲得のため折伏へ総力を傾注した。組織のさらなる拡大が至上の命題として目指されたのである。

しかし、このようなかつての日本・創価学会の戸田時代のような「折伏大行進」、あるいは、SGI-USA のウィリアムス初代理事長⁴⁴⁾さながらの「大量折伏」への邁進に対する疑念の声が、当該方針への反対者が「粛清」されることもあい継ぐなどして次第に抑えがたくなってきたという。要は、何のための信心であるのかと、これでは本末転倒ではないかと、大量折伏への傾倒が批判されるようになったのだという。

ミラノを中心とする北部の責任者である神崎は、理事長であり中部の責任者である金田と、最初、歩調を合わせこの規模拡大路線に同調したが、2001年の春以降は、袂を分かったという。

金田と神崎は、そして中島は、先に述べたような「三者体制」をとることで、互いに競い合いながらそれぞれの地域の発展に努めてきたのであった。この体制は、切磋琢磨を促す側面と適宜チェ

ック機能が働くという側面があったと考えられる。そして、いわばそのチェック・アンド・バランスは、あるところ、おそらくは90年代半ば以降くらいまでは上手く働いたのだと思われる。

それが、バランスが失われたのは、98年秋、金田の妻・喜美子が亡くなった頃だったと思われる。喜美子は、ダディーナの後、おそらく92年のイタリア文化会館のオープンの後から第二代婦人部長を務めたが、朗らかで明るい人柄がイタリア人からも慕われ人気があったという。喜美子目当てで、金田の家に会員たちがよく集まっていたという。

金田は、ズバツと結論だけを言うようなところがあって、頑固オヤジ的で、男尊女卑的というか、家父長的という雰囲気のある南イタリアなどでは一部人気も高かったが、言ったことが当たったときはいいが、外れたりもすると、喜美子がいれば、そこでワンクッションあったが、喜美子亡き後はそれが無くなってしまったという。

それで、金田は、神崎と連絡を密にするようになったということのようだ。つまり、ワンクッション役で諸事の相談役でもあった喜美子に代わり、神崎に連絡を密にすることで、二人は2000年に至る折伏への傾倒と組織拡大路線へ足並みを合わせたと考えられるようだ。

しかし、2001年5月頃になると、神崎はこれではまずいと、金田との同調路線から離れたという。組織拡大を第一とし、そのために派閥化が進行することを危惧してのことであったという。

もともと金田（分析的）と神崎（抱擁型的）は、キャラクターは異なっているが、性格の似た側面としては積極型というか、前進的、あるいは「男性的」で押し出しが強いところは重なるようだったという。池田は、二人を称して、「前世は似た者夫婦だったのだから、仲良くせよ」と述べていたという。しかし、この言葉のもう一つの裏

の意味は、似た者同士だから喧嘩ばかりしているという皮肉も込められていたようである。

それでも、組織の混乱はありつつも、2002年に会員数は2万人に達していたという。混乱については日本・創価学会、そして池田に相談が持ち込まれ、2002年4月に中島がまず理事長代行として就任し、11月になって「いろいろあったが、20年間理事長職をがんばったな」と池田から労われるように、金田は理事長を退き（名誉理事長となる）、中島が二代目理事長に就任している。

中島の理事長就任は、長年の「調整役」としての「功績」が、混乱からの回復にあたり必要とされたのだと思う。中島は、金田と神崎の間であって、フリクションを逃すコミュニケーション調整役を果たしてきたのであった。「三者体制」として切磋琢磨によって、組織発展が功を奏したのも、このような中島のバランス感覚と独自の貢献があったのことだと思われる。

*

さて、その後のイタリア創価学会のさらなる歩みについては、ラフであるが、いくつかの重要な変化と出来事などについて述べておこう。

会員数の推移であるが、中島が理事長就任後も順調に伸び続け、2012年には63,000人ほどに達している。近年はイタリア中部と南部の伸びが大きいということであるが、2012年9月19日時点での詳しい地域別会員数の分布は、次の「表1」のようになっている⁴⁵⁾。

「表1」には記載していない州の会員数も足し合わせると、総計は62,666人となる。すぐに分かるのは、フィレンツェを含むトスカーナ州の会員数が大きいことである。次ぐのは、ローマを含むラツィオ州であるが、トスカーナとラツィオでは人口規模が倍ほども違う（トスカーナは370万、ラツィオは590万）。

3番目はミラノを含むロンバルディア州である

表1 イタリア創価学会会員数(2012年9月)

州名	州都	会員数
ピエモンテ	トリノ	6,113
リグーリア	ジェノバ	3,379
ロンバルディア	ミラノ	7,249
ヴェネト	ヴェネツィア	1,671
エミリア=ロマーニャ	ボローニャ	5,723
トスカーナ	フィレンツェ	13,905
ラツィオ	ローマ	12,230
カンパニア	ナポリ	2,113
プッリャ	バーリ	1,176
シチリア	パレルモ	2,146
サルデーニャ	カリヤリ	2,627
上記の合計		58,332
総会員数		62,666

が、フィレンツェの半分ほど、ローマと比較してもかなり差がある。ロンバルディア州は人口規模がイタリアで抜きん出て大きく1千万人を超えているので、見方によっては、会員数が伸び悩んでいるということが出来るかもしれない。その理由としては、90年代後半からの混乱が大きかったこと、そして、中心者であった神崎が2008年に亡くなったことで、その後の伸びが鈍ったという事情を物語っているのかもしれない。

ミラノが伸び悩んでいることは、現在(2012年)の会員からの献金(「財務」という)にも反映されているようで、ロンバルディア州はイタリア全土を17州に分けて募っている順位で16番目であるという。ちなみに17番目はシチリアであるというが、これは非常に重要な意味をもつ数字であると思う。

最も豊かなロンバルディアが、GDPでその半分ほどにすぎないシチリアと同程度の「財務」しかないということは驚くところもあるが⁴⁶⁾、じつは一人当たりの金額はロンバルディアが全土でも

第1位であるというから、「財務」を行う会員数が少ないということが分かる(信仰は継続しつつも、組織とは懸隔した会員が多い)。そして、このことがまた、かつての混乱の傷の規模と深さ、そしてミラノを牽引してきた神崎の死去の影響をさらに裏付けているかもしれない。

もう一度「表1」に戻ると、表の上から下へ、だいたい北から南へ州名が並んでいるが、ピエモンテ州からラツィオ州までの北中部までで会員のかなり大部分を占めていることが分かる。南部には会員数は多くないというべきであろうが、それでもシチリアやサルデーニャのような島嶼部まで会員が存在していることもわかるし、サルデーニャは人口規模(165万)からすると会員比率は高いかもしれない。

日本・創価学会の「会館」にあたる拠点施設は、これまで述べたフィレンツェの「イタリア文化会館」、および2014年に正式開館した「ミラノ池田平和文化会館」などのように、歴史的に由緒ある土地や建物を活用し、かなりの規模のものもある。他には、ローマ・トリノ・ジェノバ・ボローニャ・リヴォルノ(トスカーナ)など北中部にあり、南部では、サレルノ(カンパニア)・バーリ・カリヤリ(サルデーニャ)・カタニーヤ(シチリア)など規模は様々であるが開設されている。

なお、イタリア創価学会は、今日では会館の開設や維持、職員の雇用など組織運営について、経済的に自立していることも特筆に値するだろう。これは他の多くの国々のSGIの中でも例外に属するものと思われる。

さて、2012年以降についても、いくらか数字をあげて補足しておこう。2017年5月には、会員8万9千人となっている。この年、他のヨーロッパ諸国では、フランスの2万人、イギリスの1万2千人、ドイツの6千人、スペインの4千人と

いう概況であるので⁴⁷⁾、いかにイタリアが活況を呈しているのかが理解できるだろう。なお、2018年11月には9万人を超え、2020年には10万人、2030年には15万人が目標とされているという⁴⁸⁾。

2018年9月に組織の人事についても更新があり、中島が理事長を退き、イタリア人のアルベルト・アプレアが新たにイタリア創価学会会長⁴⁹⁾に就任し、初めてイタリア人が組織のトップリーダーとなっている。四者のリーダーもこの少し以前からすべてイタリア人になっていたが、新たに副会長に任ぜられたサカキとサカキの後任の書記長が日本人である以外は、重要役職はすべてイタリア人が担う体制になった⁵⁰⁾。この2018年秋の新体制によって、イタリア創価学会は実質的にイタリア社会に根を下ろしたといえることができると思われるが、これは、次に述べる「インテサ(宗教協約)」も同様にその証左となるかもしれない。

国民の8割がカトリックのイタリアにおいて、イタリア創価学会は、イスラム、プロテスタントに次ぐ規模となり、2016年7月「インテサ(宗教協約)」が、イタリア政府との間で締結され発効した。「インテサ」とは、国家が厳正な審査の上、特定の宗教団体に一定の権利や特典を保障するもので、学校での宗教教育、研究教育機関の設立なども認められる⁵¹⁾。ちなみに「インテサ」によってイタリア創価学会は「1000分の8税⁵²⁾」の対象になったが、2020年においては、その分配金は全額を新型コロナ対策のために寄付したという。

ここまで、およそ60年にわたるイタリア創価学会の歴史を概観してきたが、以下では、その信仰がなぜ・どのように受容されているのか、その理由を考えてみたい。

3. *Sud*

最初に「右を見ても左を見ても、なんでこんなにたくさん教会ばかりなのに、わざわざ日蓮仏法を始めたのか」と尋ねてみると、「そこへ来るか」といった調子で、イタリアでのインタビューは、たいていなごやかに滑り出すことができた。

バチカンのお膝元、圧倒的多数がカトリックであるイタリアにおいて、20世紀半ば以降、日蓮に由来する日本仏教が、なぜどのように息づいてきたのか概観しよう。その際、上述したように、必ずしも会員数は多くないが、しかし今日急伸著しいと伝えられる南部に焦点を合わせると、その理由がより明瞭になるのではないかと思う。

ナポリでインタビューを行った、R・S(愛称レッコ、1959年生)は⁵³⁾、ポピュラー音楽のクラリネット奏者である。レッコは1982年、友人のピアニストから下種⁵⁴⁾され、初めて座談会に出たのはその年2月のことであった。

レッコたち世代の青年時代、若者は音楽と薬物が興味の中心だったという。レッコも、そういう時代の空気を吸い、保守的文化の色濃い社会を変革したいと模索するなかで、この仏法に出会ったという。

入信前は、闇で大麻を売っていたという。信心を始め、不可能を可能にできる教えだと聞いたが、当時クラリネットを入手したので、これで食べていけないかと思ったのだが、それが本当になり、「変毒為薬⁵⁵⁾」できた。すごい「初信の功德⁵⁶⁾」だと思ったという。クラリネットで生活できるようになり、大麻を売る必要もなくなり、また家も見つかるなどし、これこそ「因果俱時⁵⁷⁾」だと思い、それで信心にいつそう拍車がかかったという。

レッコが信心を始めたころ、ナポリでは1グループの15人くらいしか会員が存在しなかった

が、初信の功德を実感したので、友人たちを一生懸命に折伏し、84年11月にはナポリで2グループになったという。87年から88年頃はかなり伸びた時期だった。

ナポリ方面は、今(2014年)は800人くらいが座談会に出席しているという。なお、ナポリにはまだ会館はなく、座談会や会合は個人宅などで行われている。カンパニア州では、ナポリの南のサレルノに会館があり、会員数もナポリを上回る。

ナポリの草創期からの会員であるレッコは、初信の功德以来ずっと信仰を継続し、クラリネット奏者として仕事も順調で日々充実しているという。御本尊をいただいたのは86年で⁵⁸⁾、今日まで途切れることなく信心しているうちに、レッコは分かってきたことがあるという。

それは、極論すれば、そもそもナポリの民衆はカトリックでもないということになるのだが、何百年か前、ナポリは聖職者だらけで、人口の半分以上がそうだったという。そういう皆はずっと神を待っていたが、神はいつかナポリにやって来ていない。それでもただ受動的で敬虔でひたすら祈り続けるばかりだった。

ナポリ民衆はいつもずっと受動的で、ギリシア人が来たり、スペインに支配され、あるいはフランスが来たり、自ら国を持ったこともない。自分で自らの運命を切り拓いたことがない。ただ祈るばかりで起こったことを甘受してきただけということなのだという。カモツラさえ今も敬虔なカトリックであるが、スペイン時代も皆、ただただ祈りを捧げ続けているだけだった。しかし、そういう人生のあり方は間違っているということが、日蓮仏法を知って分かったのだという。

つまり、聖母マリア様に、(御利益をお願いするよう)祈るばかりではどうにもならないということが分かったというのだ。

ここで述べられていることは、おそらく、レッコに会った翌日、私たちがナポリ大聖堂で目の当たりにしたような光景に対応しているのだと思う。その翌日、私たちは眼前の「奇蹟」に、まさに目からウロコが落ちるような体験をしたのであったが、レッコは、サン・ジェンナーロへの篤い崇敬のような、キリスト教以前の信仰要素の色濃いことを指して、まだ神はナポリにやって来ていないのだと述べたのだと思う。

その神について、レッコは勤行唱題⁵⁹⁾を重ねるうち、さらに分かったことがあるという。それは「神は裁き、仏は癒す」という対照なのだという。

神の裁きということであるが、そもそも「裁く」とは、ある存在に対し、罪ありとする評価・認定が前提になっているだろう。カトリックのみならずキリスト教が共有する、裁かれるべき存在という人間観は、そこに「原罪」意識が執拗低音のように人々の意識と意識下に浸透した風土において今日も強く持続していると考えられる。

原罪とは「人祖が人類のはじめに犯した罪の結果、すべての人間が神との親しい交わりを欠き、罪の支配下に陥ったこと」であるという⁶⁰⁾。このような原罪を負った存在という人間観は、私たち平均的日本人のそれとはかなり懸隔しているだろう。

もっとも大きく隔たるのは、そういう原罪を負った存在が救済される(あるいは、されない)地平が、この世=現世ではなく、「死後のさばきを受け、すべての人びとは世の終わりに、よみがえってから一緒にキリストのさばきを受け」「ただちに天国の幸いか、地獄の罰か、煉獄のきよめを受け」⁶¹⁾という点であるだろう。ここでは、救済が、現世でない地平に定位されるがゆえ、ヴェーバーが「現世否定的」と呼んだ宗教の特質がある。

レッコの信心の滑り出しが、初信の功德という

御利益だったとしても、長期間にわたり勤行唱題を重ね、信心を継続してきたのは、13世紀日本に淵源し、創価学会が増幅した日蓮仏法の教えに魅了されたからであるだろう。レッロは、その核心を、「神が裁く」宗教風土において出会った、「仏は癒す」という教えであると述べている。

「仏は癒す」とは、つまり、仏によって癒される者は、心や体の健康を回復し、また歩み出すということであろうが、その一步を踏み出すのは、けっして「あの世」においてでないだろう。天国でもないが、もちろん煉獄であるはずはなく、まったく地獄でもない。「この世」において歩むということであるはずだ。

そもそも、日蓮仏法においては、「あの世」も存在しなければ「この世」も存在しない。より正確に述べれば、「浄土と云ひ穢土えと云うも土ふたつに二へだての隔なし」ということなのである。それはつまり、「衆生の心けがるれば土もけがれ心清ければ土も清し」ということであるからだ。有名な日蓮「一生成仏抄」の一節である⁶²⁾。

あの世もこの世もない、浄土も穢土も一つであるという世界観は、天台智顛の『摩訶止観』に説かれる「一念三千いちねんさんぜん」と「十界互具じっかいごく」に由来し日蓮思想の基底をなしている⁶³⁾。

「一念三千」とは、私たちの日常のわずかな心のうごき（一念）中にも、全世界の真理が含まれるという考えである。生ある存在の十の世界⁶⁴⁾のそれぞれが、自らのうちにまた十の世界を具えている（十界互具＝百界）。その意味は、私たちのうちに、地獄から仏に至るすべての要素があるということである⁶⁵⁾。

「一念三千」の「三千」は、百界のそれぞれが十の範疇（十如是）を具え、またそのそれぞれが「三世間」を具えているという考えである。したがって、私たちのわずかな心のはたらきにこの三千（ $100 \times 10 \times 3$ ）が具わっているということにな

る。私たちが生きている一瞬一瞬に、三千世界が宿っているのだ。

このような「一念三千」論に立てば、人間は、来るべきときの来るべき裁きを待つどころでなく、ただ、今・ここで・この瞬間に渾身の力を尽くし生きる以外にないという思いに駆られるにちがいない。じつは日蓮のみならず、日本宗教の特質は、このような現世に積極的に向き合う姿勢を招来することにあるが、分けてもとりわけ「現世肯定的」であるのは日蓮が説くところである。

現世肯定的であるとは、理想郷としての宗教的世界像と現世の対立を極小化することであるが、約めていえば、救済をこの世に定位させることである。それは、世界像を聖なるものと絶対化し現世からの価値を剥奪する方向、つまり「現世否定的」な方向とは真逆である⁶⁶⁾。

では、どのように現世において救いに至ることができるのか。それは、以下のように、やはり有名な日蓮の説く一節に存する。「夫れ浄土と云うも地獄と云うも外には候はず・ただ我等がむねの間にあり、これをさとるを仏といふ・これにまよふを凡夫と云う、これをさとるは法華経なり、もししからば法華経をたもちたてまつるものは地獄即寂光とさとり候ぞ⁶⁷⁾」。

つまり、法華経をたもつことで、凡夫も浄土、つまり救済に至ると明快に説かれているのである。そして、「法華経をたもつ」とは、「唱題行」とであるとされる。つまり「南無妙法蓮華経」の七字の題目を唱える唱題行という「易行」である。

「易行」、つまり、この誰でもすぐにできる修行が眼目である点も、日蓮仏法が今日 SGI Buddhism として世界 192 カ国・地域に伝播した所以の一つであると考えられるだろう⁶⁸⁾。

唱題行こそ「仏界湧現の直道」であり「生命変革をもたらす最高の仏道修行」とは池田の言でもあるが、それはなぜ生命変革を引き起こすのか、

ここは重要である⁶⁹⁾。

日蓮は「我が己心こしんの妙法蓮華經をあげ奉りて我が己心中の仏性・南無妙法蓮華經とよびよばれて顕れ給う処を仏とは云うなり」と述べている⁷⁰⁾。ここで重要なのは、一つは、誰もが自分自身(己心)の中に、妙法蓮華經という仏性が存在するという指摘であり、もう一つは、その自分自身の中の仏性は「よびよばれて」顕現するということである。では、誰が呼ぶのか。

日蓮は、有名な譬喩によって説明している。「譬えば籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集まるが如し、空とぶ鳥の集まれば籠の中の鳥も出でんとするが如し口に妙法をよび奉れば我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ」⁷¹⁾。

籠の中の鳥と、外で鳴く鳥の呼び合う、切ない光景が浮かぶようだ。その切なく呼び鳴く声こそ「無明・煩惱に束縛された衆生が信心を起こして唱える題目」⁷²⁾なのであり、その鳴き声に應える声が「我が身の仏性もよばれて必ず顕れ給ふ」と日蓮は力強く断定している。

このような断定に接するとき、私たち凡夫は、あるがままで肯定されるという至福の感情を経験すると思う。おそらくこの点において、現世肯定的な宗教として日蓮仏法の魅力が生まれると考えられるだろう。

*

ここまで、13世紀日本思想に遡りながら考察をめぐらせたが、20世紀後半以降、日蓮仏法が時空を隔て、キリスト教の故地においても、けっして少なくない人々の心をとらえている所以の一端でも示唆できたとすれば望外の喜びである。

レッコが、まだ神はやって来てもいない述べたナポリ、そして南イタリアでの日蓮仏法の浸透度はまだ低いのであるが、興味深いのは、すでに紹介した IBISG 前理事長の中島の語るように、今日その南部で伸びが大きいということである。

その理由の一つは、すでに述べたように、原罪意識に深く彩られた思想風土において、現世肯定的な救済観が強い自己肯定的な人生観をもたらすことにあると思われる。

もう一つは、「南」的な状況においてなにより重要であると考えられる「連帯」を可能にする「異体同心」という日蓮仏法のエートスにあると想像できそうである。

日蓮は「異体同心なれば万事を成し同体異心なれば諸事叶う事なし」⁷³⁾と、^{あつわら}熱原法難⁷⁴⁾における農民信徒の団結を讃えた。この「異体同心」は、戦後日本において創価学会が急成長を遂げたときも、運動体の連帯・団結を支える価値として強調され実をあげてきた。戦後日本社会における「異体」的状況⁷⁵⁾もまた深刻であった事情もある。

アメリカ合衆国にこの宗教が伝播すると、日本では存在しなかった、人種民族問題という「異体的」状況に遭遇したのであった。この深刻な問題に SGI-USA がどう取り組んだのか、それを象徴するのが 1980 年シカゴにおける出来事であったと思われる。その詳細はここでは述べないが、エスニック集団ごとに分離した社会状況で「異体同心」は新たな結集の原理を提供できたのである⁷⁶⁾。

冒頭で述べた「南部問題」というイタリア固有の「異体的」状況についても、「異体同心」はそれに対応する新しい姿勢を生み出しつつあることを見出している。

しかし、この点について、紙幅も尽き、またいっそうのデータの蓄積を目指しているので、他日を期し、将来課題とさせていただきます。

〔付記〕

本稿の背景について付記する。

イタリア調査は、2012年2月フィレンツェ・ローマ、同年9月ミラノ・ローマ、2014年9月ミラノ・カターニャ(シチリア)・ナポリ、2016年3月ミラノ・

トリノ、2017年9月フィレンツェ・ヴェネツィア・ローニャにおいて行った。

実査では、日本・創価学会国際広報部（当時）を通じ、イタリア創価学会から調査の意図に沿ったインタビューの方々をご紹介いただき40名ほどに詳細なインタビュー実施することができた。

調査および関連データの収集は、2017年を除き、科研費補助金（平成23-27年度基盤研究（B）「欧米多民族社会における日本型新宗教の受容と展開－新たな共同性と宗教の役割」研究代表者：秋庭裕 研究分担者：川端亮・稲場圭信）により行った。

2017年11月と2018年1月、SGI-USA 研究について科研調査の成果を出版できたので、イタリア（とイギリス）調査をより本格化する心積りであったが、そのための科研費など研究助成取得が上手くいかなかった。また2020年以降は、新型コロナウイルスの世界的蔓延によって海外渡航も実質不可能となってしまった。

結局、2017年頃には、イタリア創価学会について研究をまとめるおぼろげな枠組みが見えてきつつあったが、その後、実査に赴く機会を得ることがかなわなかった。

論文執筆にあたりもっとも足りないのは、Il Nuovo Rinascimento や Buddhismo e Societa のような機関誌類のデータで、これらは日本では調達できなかった。また、SGI-USA 調査に比べれば、焦点を絞ってのデータの蓄積もまだ薄い。さらに、イタリア語の「壁」を突破するための便益は、研究助成なしでは調達できなかった。

このような次第で、稿を起すのは難しいと思っていたが、昔日、森川眞規雄先生にうかがった、E. R. Leach の故事⁷⁾を思い出し、勇躍一步を踏み出すことにした。

同時に、まだ一語も記していなかったイタリア創価学会について、大変お世話になった多くの方々のご恩にお応えするため、様々な不足と非力と無謀を顧みず、ここに一文を認めた次第である。彼の地の皆様に心より篤く御礼申し上げます。

[注]

- 1) 北村 2005 : 133
- 2) スクデットは、小さな盾の意。セリエ A の優勝チームの選手に与えられる盾形のバッジ。転じ、優勝のこと。
- 3) マラドーナについて、多くは以下に拠った。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/ディエゴ・マラドーナ>
2022/01/02 閲覧
- 4) 入り組んだ事情について詳しくは、小稿が、マラドーナとナポリについて多くを負っている北村

(2005) をぜひ参照のこと。

- 5) 北村 2005 : 8
- 6) 北村 2005 : 13
- 7) ちなみに、1988年時点でイタリア全体の国内総生産指標を100とすると、北中部は118.8であるが、南部は67.3にすぎない（北村 2005 : 81）。
- 8) 車好きは「アルファ・スッド（南）」の「失敗」を思い起すかもしれないが、近年では、ポミリアーノ・ダルコの元スッド工場は、アルファ・ロメオの主力工場になった。
- 9) 村上 2018 : 80
- 10) ナポリでは「カモッラ」が知られている。マラドーナは、カモッラと交際密であったといわれている。
- 11) 村上 2018 : 81-2
- 12) 北村（2005 : 26）および八木（2008）を参照のこと。
- 13) 「ナポリとサッカー」
<https://napolissimi.com/diego-maradona/> 2022/01/02 閲覧
- 14) 「世界ふれあい街歩き ナポリ・イタリア」
<https://www6.nhk.or.jp/sekaimachi/archives/deai.html?fid=130402> 2022/01/02 閲覧
これ以外にもマラドーナを祀る祠堂や祭壇はいくつも存在するようだ。
- 15) 左の窓から吊り下げられているのは、SSC ナポリのユニフォーム調 T シャツ（撮影：稲場圭信氏 2014/9/22）。
- 16) サン・ジェンナーロについては、以下を参照
<https://www.marinellatokyo.jp/blog/midtown/5334.php>
2022/01/05 閲覧
- 17) ジェンナーロ祭の開催が告知されている（ジェンナーロ祭他写真も撮影：稲場圭信氏 2014/9/22）。
- 18) マラドーナは、聖歌「テ・デウム Te Deum」（神よ、私たちはあなたに感謝します）をもじり、「テ・ディエグム Te Diegum」（ディエゴよ、私たちはあなたに感謝します）とまで賛美された。
- 19) 本稿では、Istituto Buddista Italiano Soka Gakkai (IBISG：イタリア創価学会) と SGI Italia (イタリア SGI) の名称を互換的に用いるが、イタリアでは前者の使用頻度が高いようなので、原則それにならう。
- 20) 詳細は、秋庭（2017）、川端・稲場（2018）を参照。
- 21) 日本では800万世帯といわれている（秋庭 2017 : 2-3）。
- 22) 秋庭 2017 : 1-6
- 23) その「高度成長」は、70年代初頭、おそらく1973

- 年までは滞ることなく持続した(秋庭 2017: 95-9)。
- 24) 創価学会三代会長年譜編纂委員会 2005: 77
 - 25) 原義は、日蓮の教えに基づき、法華経の教えを広く宣(の)べて流布=布教すること。
 - 26) 創価学会三代会長年譜編纂委員会 2005: 67
 - 27) 中島寿子さんへのインタビューは、2012年2月20日ローマのホテルにおいて行った。
 - 28) 創価学会の「四者組織」は、ジェンダー・世代別の壮年部・婦人部・男子部・女子部(合わせ、青年部)からなる。四者組織は、基本的に海外でも踏襲された。次も参照のこと(秋庭 2017: 249)。なお、日本では2021年11月より婦人部と女子部が統合され「女性部」となっている。
 - 29) 池田 1998: 54
 - 30) 72年落慶。創価学会が渾身の力を注ぎ建立、当時の本山・富士大石寺に寄進。
 - 31) 中島保氏へのインタビューは、2012年2月19日(於: フィレンツェのホテル)、および同年9月24日(於: IBISG ローマ文化会館)において行った。
 - 32) 「三証」とは、日蓮教学の概念。文証(もんしょう)は、聖典の裏付・理証(りしょう)は、道理・理論的根拠・現証(げんしょう)は、文証・理証に基づいた実践の現実への現れを指す。
 - 33) 金田光弘氏へのインタビューは、2012年2月18日フィレンツェの「イタリア文化会館」で行った。なお、Macioti (2002: 45)も参照できる。
 - 34) 秋庭 2017: 37-55
 - 35) 神崎忠保氏については、夫人の真知子さんに2016年3月1日コルシコ市「ミラノ池田平和文化会館」においてインタビューを行った。
 - 36) フランコ・マルサルディ氏には、2012年9月20日および2016年3月1日コルシコ市「ミラノ池田平和文化会館」においてインタビューを行った。
 - 37) 「地涌の菩薩」とは、釈尊滅後の法華経の弘通を託され娑婆世界に湧き出てきた無数の菩薩たちのこと。
 - 38) 『歩く太陽』とは、ベルガモで神崎の薫陶を受けた Adele Violi がまとめた神崎の評伝のタイトルでもある。
 - 39) 教学誌はもう一誌『仏法と社会 *Buddismo e Società*』(2001年刊)がミラノで編集・刊行されている。
 - 40) 日本・創価学会は、伝統的に会員数を世帯単位で数えるが、この伝統はこの時代のイタリアでも引き継がれ、私たちがイタリアで閲覧した数字に、世帯数でカウントした会員数と個人単位の数字が混在するのは、このような事情による。なお、このデータは、2014年9月17日フィレンツェのイタリア文化会館で閲覧した。
 - 41) 榊勝彦氏には、[付記]したイタリア調査の全通でお世話になり、またその都度インタビューさせていただいた。また IBISG 書記長(現在は副理事長)の役職にあり、様々な基礎データをご提供いただいた。
 - 42) 三分割自体は、池田が6度目の訪伊を果たした81年6月になされたのかもしれないが、神崎がミラノへ、そして金田がフィレンツェへ移動し、「三者体制」がいわば「確立」したと思われる。
 - 43) 詳しくは、秋庭(2017)および、川端・稲場(2018)を参照のこと。
 - 44) 日本名は、貞永昌靖。ウィリアムスは、しばしば「ストリート折伏」による大量折伏を繰り返した。
 - 45) 以下のデータは、中島保氏へのインタビュー(2012年9月24日)に基づくリジッドな数字。なお、この折は、夫人の中島アサ IBISG 婦人部長も同席いただき、様々有益なご教示をいただいた。
 - 46) ちなみに、1988年時点でロンバルディア州の国内総生産指標を133.1とすると、シチリア州は66.6であり、南部全体は67.3である(北村 2005: 81)。
 - 47) なお、このとき SGI-USA は11万人以上(いずれも日本・創価学会において教示された数字)。
 - 48) 『聖教新聞』2018/11/27の記事による。2020年の目標の達成状況については不詳。
 - 49) 「会長」が理事長と分けられたようである。
 - 50) 『聖教新聞』2018/9/19
 - 51) 創価学会広報室 2021: 26
 - 52) 「1000分の8税」とは、個人所得の0.8%を国家の社会・人道活動、または国家が定める一定の宗教団体へ分配することが法律で定められ、納税者がどこへ納めるか選択できる。
 - 53) レッロさんには、2014年9月21日ナポリのお宅にお伺いしインタビューを行った。本名は伏す。
 - 54) 「下種」とは、日蓮仏法の「種を下ろす」こと、つまり教えを広めるために仏縁を結ぶこと。
 - 55) 妙法(法華経)の力によって、苦悩に支配された生命を仏の生命へと転換すること。
 - 56) 信仰の最初の段階で感じる(御本尊=南妙法蓮華経)の功德。
 - 57) 法華経において、本来万人に仏界がそなわっていて直ちに開き現すことができると説かれていること。
 - 58) 「本尊受持」のときが正式入信となる。御本尊とは、日蓮が図顕した曼荼羅の書写。イタリアでは、下種から入信までの期間が比較的長いようだ。ち

- なみに、入信によって「折伏」となる。
- 59) 創価学会会員の基本的信仰実践。後述。
- 60) カトリック中央協議会 1998 : 30
- 61) カトリック中央協議会 1998 : 114
- 62) 堀編 1952 : 384
- 63) 末木 2000 : 38-9
- 64) 十界のこと、つまり、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏。
- 65) いかに「輪廻転生」と隔絶しているか注意せよ。
- 66) 厚東 1995 : 147-8
- 67) 堀編 1952 : 1504
- 68) 秋庭 2017 : 215
- 69) 池田 2007 : 37
- 70) 堀編 1952 : 557
- 71) 堀編 1952 : 557
- 72) 池田 2007 : 57
- 73) 堀編 1952 : 1463
- 74) 1279年駿河国熱原において、農民信徒が北条得宗権力より弾圧を受けたが、退転することなく信仰を貫いた。
- 75) 様々な社会経済的格差。
- 76) 秋庭 2017 : 127-45
- 77) Leach (1964 : Appendix vii) を参照。

【参考文献】

- 秋庭裕 2017. 『アメリカ創価学会〈SGI-USA〉の55年』新曜社。
- ハモンド, P.・マハチェク, D. (栗原淑江訳) 2000. 『アメリカの創価学会——適応と転換をめぐる社会学的考察』紀伊国屋書店. (Hammond, P. and Machacek, D., 1999. *Soka Gakkai in America : Accommodation and Conversion*, New York : Oxford University Press.)
- 堀日亨編 1952. 『日蓮大聖人御書全集』創価学会 (第241刷、2005年)。
- 池田大作 1998. 『母の曲』聖教新聞社。
- 池田大作 2007. 『一生成仏抄講義』聖教新聞社。
- カトリック中央協議会 1972. 『カトリック要理 改訂版』サンパウロ (初版31版、1998年)。
- 川端亮・稲場圭信 2018. 『アメリカ創価学会における異体同心 二段階の現地化』新曜社。
- 北村暁夫 2005. 『ナポリのマラドーナ イタリアにおける「南」とは何か』山川出版社。
- 厚東洋輔 1995. 「アジア宗教への道」徳永恂・厚東洋輔編『人間ウェーバー』有斐閣, 119-52.
- Leach, E. R., 1964. *Political Systems of Highland Burma*, London, The Athlone Press.
- Macioti, Maria Immacolata (Translated by Capozzi, R., M., 2002). *The Buddha within Ourselves*, Boston, University Press of America.
- 村上信一郎 2018. 『ベルルスコーニの時代——崩れゆくイタリア政治』岩波書店。
- 三代会長年譜編纂委員会 2005. 『創価学会三代会長年譜 中巻』創価学会。
- 創価学会広報室 2021. 『2020年度活動報告』創価学会。
- 末本文美士 2000. 『日蓮入門——現世を撃つ思想』筑摩書房。
- Violi, Adele, 2014. *Il Sole che cammina*, Collana : ZONA Contemporanea.
- ウィルソン, B.・ドベラーレ, K. (中野毅訳) 1997. 『タイム トゥ チャント——イギリス創価学会の社会学的考察』紀伊国屋書店. (Wilson, Bryan and Dobbelaere, Karel, 1994. *A Time to Chant : Soka Gakkai Buddhists in Britain*, Oxford : Oxford University Press.)
- 八木宏美 2008. 『違和感のイタリア 人文的観察記』新曜社。

